

# 私の大切な妹

わたし たいせつ いもうと

呉市立昭和西小学校五年  
磯辺彩月

私には大切な妹がいます。妹といっても本当の妹ではありませんが、今の家に引越してきた六年前から、隣の家に住むななみちゃんと大の仲良しです。一緒に遊んだり、ご飯を食べたり、お風呂に入ったたり、お泊まりをしたり、私はななみちゃんが本当の妹だったら良いのになと思います。

ななみちゃんは小学三年生で、ダウン症という障害を持っていきます。私はその障害のことを知らない時は、どうして上手くしゃべれないのかな。なんで特別支援学級に行くのかな。と思っていました。なにげなくそのことをお母さんに聞いた事がありました。お母さんは、「そっかーそーよねー。」と言いながら耳を傾けてくれました。次の日ダウン症の本を買ってくれ本を読むと、染色体という身体の部分の数が、多くの人とちがって二十三番目まである中、二十一番目の染色体がなぜか三本あることから、口の周りの筋肉が弱く、口が大きく開かないから上手く話せない

ことや、顔の真ん中の成長が遅く、周りは成長が早いから目がつり目になってしまい、ダウン症の人達は顔が似ていることが分かりました。ダウンはアップダウンのダウンではなく百年以上にジョンラングトンダウンという人が同じ身体の特徴を持つ人が沢山いることに気づいたからダウン症という名前がついたそうです。そしてダウン症は薬では治すことができません。だからできないことは訓練したり、人に手伝ってもらってできるようにします。このことを知って、できないことも一生懸命チャレンジするななみちゃんの姿が浮かびました。縄跳びでも毎日毎日一緒に練習して最初は縄も回せなかったのに今はたくさん跳んでいます。走ることも最初はむずかしかったのに今じゃ楽しそうに早く走ってこつちにきてくれます。ゆっくりだけどたくさんのができていつも自慢したそうに私に語りかけてきてくれます。いつもすごいじゃーん！と拍手すると跳んで喜び、とっても可愛いです。このような出来事は

## ◆心の輪を広げる体験作文◆

数えきれないほどあります。私は諦めず、できないことも努力していくななみちゃんが誇らしくなりました!!私は毎朝、ななみちゃんと登校しています。ななみちゃんが気分が乗らなくて、下を向いている時には、飛行機や列車の真似をしていくと足取りが早くなり、あつという間に学校に着きます。休憩時間も一緒に遊んでいます。ななみちゃんは、怖い事や、不安な事があると私のところに泣いてきたり抱きついてきます。そういう時はだっこしてななみちゃんの目を見て背中をトントンして落ち着かせます。みんなは、ななみちゃんが何を言いたいのかわからないときも、私は何を言っているのかよく分かります。だからたくさんお話をしてもらいたいと思っています。ななみちゃんが笑うと私も笑顔になってとっても嬉しいです。私にとつてななみちゃんは宝物のような存在です。私は毎朝剣道の素振りをしています。窓からななみちゃんが、がんばれー!と応援してくれるので力が湧いてきます。私の将来の夢はいい察官です。理由は、人の命を守りたい。犯罪を起こした悪い人を捕まえてみんなが安心できるようにしたいからです。登校中パトロールをしてくれるパトカーや白バイを見るとななみちゃんが喜んでけい礼をする姿を見て私は更に、けい察官になりたいと思いました。だれよりも優しいななみちゃんを守りたいと思います。

障害のある人、ない人。みんなが仲良く楽しく暮らせる社会が私の理想です。今の私には大きな事はできないけれど、いつも一生懸命がんばるななみちゃんと周りの人々が毎日笑って過ごせたらいいな。と思います。

# 心こころで通つうじるやさしい社会しゃかいをつくりたい

新座市立天和田小学校四年  
笹川稜央

夏休みに「手話体験こうぎ」に参加しました。最初に、手話サークルのボランティアの人が、三十分くらいずっと手話で通やくしているのを見て「あんなに手話できるなんてすごい」とおどろきました。その時、熱心に聞いていた人たちが「ろう者」だと後から知りました。「ろう者」の人は、耳が聞こえなくても話せるのかと思っていました。生まれつきや、幼いころに耳が聞こえなくなったので、「話せない」ことをはじめて知りました。

その後、グループになって、ろう者の人と一しよに体験をしました。ろう者の人は、にこにこしていました。が、ぼくはドキドキしました。手話を習うのではなく、「大きなさいがい」が起きた時、ろう者にどういう風に情ぼうを伝えるかといううれしゅうでした。ろう者の人は、さいがい起きて、ひなん所にひなんした時、放送が聞こえなくてとてもこまって不安になるそうです。

さいしよは、身ぶり手ぶりでやってみました。でもうまはなくてもわかりました。ぼくはこのこうぎに参加して、ろう者のことを初めて知りました。世の中には、色んなしよがいを持つ人がいるんだなと思いました。そして、しよがいを持つ人を支えるボランティアの人たちもすごいと思いました。ボランティアの人がいるおかげで、しよがい者はふつうの生活ができるし、安心してくらせるのだと思います。ぼくは、ろう者の人から感しよされてとてもうれしかったので、ボランティアの人もきつと同じ気持ちだと思います。

今まではしよがい者と聞くと近づきにくかったけど、これからはせつきよく的に話しかけたり、お手伝いをしようと思いました。ことばが通じなくても、心で通じるので大じょうぶだと思えます。ろう者の方の役にたてて、たくさん感しよされてうれしかったのでこれからもたくさん人の役に立ちたいです。

く伝わりませんでした。分からなくてもニコニコして、いっしようけんめい分かうとしてくれました。次に、紙に文字を書いて伝えました。すると、とてもよく伝わったので「よっしゃー」と思いました。話せないのに、ぼくに話しかけようとしてくれました。よく聞き取れなかったけど、何回も「ありがとう」と言ってくれたように聞こえました。ぼくは役に立てたことがとてもうれしかったので、何枚も紙を使って色んなことを教えてあげました。おべんとうを一しよに取りに行った時、ふつうに歩いているだけだったから、しよがい者って分からないのがふしぎでした。

最後にろう者の人が手話を教えてくれました。あいさつと、自己紹介のしかたを教えてくださいました。ほんの少しの手の動きで意味が変わってしまうので、ろう者の人はケラケラわらって楽しそうでした。ろう者の人が楽しそうだったので、ぼくも楽しくなりました。ぼくの手話をとても上手だとほめてくれました。ほめてくれていることは、言葉

## めざせ！世界福祉遺産

初田一心

あまぎ  
天城町立天城小学校六年

「一心がいてくれて助かったあ。頼もしくなったねえ。」  
おばが僕の背中をドンとたたいて大きな声で笑った。僕は、

「ただトイレに連れて行っただけだよ。」

と言いながらも、とてもうれしい気持ちをかくせず、にやにやがこぼれてしまった。

僕はこの夏、福岡のおばの家を訪ねた。おばの家に着くと、すぐにいとこたちが迎えてくれた。

「こんばんは。チョコエッグ。」

いとこの墨君が話しかけてきた。チョコエッグを手渡すと墨君は、そそくさと部屋の中に入ってしまった。「やっぱりチョコエッグには勝てないかあ。」みんなで大笑いした。これが僕のいとこの墨君だ。

墨君は、小学四年生。知的障害と自閉症スペクトラムの症状があり、特別支援学校に通っている。墨君の障害については、僕はよく知らない。でも、墨君のことならよく知っ

まった。その時、墨君が乗ってはいけないうところに乗ってしまい、係の人に注意されてしまった。墨君は、注意されても知らんぷり。係の人は不機嫌そうに行ってしまった。「そんな言い方しても伝わらないのに。」僕は少し腹が立った。

「だって、墨が悪いことしたんだから怒られるよねー。」

と、おばが笑っていたが、本当は悲しかったんじゃないかなと思う。「どうすればよかったのかなあ。」と考えていると、

「えっ、みんなのトイレがない。」

と、おばが言った。不思議に思ったけれど、

「僕が一緒に行くよ。」

と言って、墨君の手を引いてトイレに連れて行った。後から合流した母に、おばが、

「一心がいてくれてめっちゃ助かったのよ。みんなのトイレがなくて、男子トイレには入れないし。まだ一人で公衆トイレに行かせるのは怖いから。」

と話していた。それを聞いて母も、

「一心、やるじゃない。助かる。」

と言って、珍しくほめてくれた。その後、

「でも、墨にもヘルプマーク必要かもね。」

と、母とおばが真剣に話しているのを見て、僕もいつの間

ている。墨君は、数字が大好き。どんなに大きな数字でも、英語に変換して言う。しかも、どんな数の倍数でも、暗算して、どんどん紙に書き出していく。この数字を読むときも英語。九の倍数を千近くまで書き出しているのを見ると、感心しつつも、「ちょっと悔しいな。」とも思う。僕が、「これって英語でなんだっけ。」と考えていると、何食わぬ顔をして、

「シックスハンドレッド、フィフティセブン。」

と、墨君は、つぶやいた。

「すごっ。僕の頭の中が分かるの。」

と、僕はびっくりして墨君の顔をまじまじと見たが、墨君は知らんぷり。知らんぷりしているのは無視ではない。ちゃんと聞いている。ただ他のことに興味があって反応しないだけ。これが墨君だ。

こんな墨君と一緒にアスレチックパークに出かけた。とても楽しくて、ついつい大きな声を出してはしゃいでしかうなずいていた。

今回のことで、僕は、環境の整備と「目に見えにくい障害」についての理解の重要性に気付いた。環境の整備については、政治家や大人の皆さんに任せるとして、僕にもできることはないだろうか。人が理解を持ってお互いに関わることでできれば、問題は軽減できるかもしれない。色んな人の立場に立つてものを考えることが、全ての人が気持ちよく生活するための土台作りになる。今回、「墨君とトイレ一緒に行く」というたった一つの行動で助かる人がいるということが、僕には大きな自信になった。僕の住む徳之島は、環境整備が十分とは言えない。でも、人はとても温かい。これを生かして、まずは、全ての人が気持ちよく生きることのできる徳之島を作りたい。そのために、僕は始める。自分のできること探しを。

# きつ音おんのぼくと障害しょうがいの妹いもうと

原はら 國くに 海かい 音と

よこはま  
まいおか  
横浜市立舞岡小学校六年

ぼくは、ようち園のころからきつ音があります。言葉をくり返したり、つまってしまい話せなくなりませす。クラスの友達にからかわれたり真似されたり、しゃべり方を指てきされてつらい経験もしました。どもっていることに気付かれないように自分の言葉に変えて話したり、話すことをあきらめてしまうことがあるけれど、本当のぼくは、人と会話することが大好きなのに。

ぼくがいやだと思っっていることは、どもりを真似されたり、笑われたりすることよりも「どもるからかわいそう」という思いで見られたり、付き合うことです。それが一番きずつくことなのです。きつ音がある自分をかawaiiそうな人間だとは思っていません。きつ音は、治るものではないからこの先も上手に付き合っていきたいです。きつ音があるぼくは個性だと思っいます。自分が好き I・a m o k を胸に生きていきます。

分かりやすく伝えたり表現することが苦手です。相手か言っっていることや感っじていることを理解したり、気付くことが難しいです。ぼくは、妹と会話するときに心がけていることがあります。簡単な言葉でゆつくり話します。短い言葉で具体的に伝えます。妹は今後の見通しや、自分のやることが明確だと安心します。困っっている時は、スケジュールや手順など目に見える方法で教えます。自分に出来ることを少しづつ考えて支援できたらいいと思っいます。

妹のすごい特性もたくさんあります。いつ、どこで何をしたか、何年も前のことをしつかり記憶してっいます。記憶力は、ぼくよりも優れてっいると思っいます。生活リズムが規則正しく、時計を見て行動してっいます。一週間の家族のスケジュールをはあくしてっいます。学校の決まりごとや家庭のルールは必ず守ります。どれも当たり前のことかも知れないけれど、妹はきちんと日課をこなします。

妹がいなかったら、障害のことを知らないまま大人になっっていたと思っいます。障害は、個性のひとつであることを知ってほしいです。人に優しい社会であってほしい。誰もが安心できる居ごこの良い社会にしてっきたいです。

そして、ぼくの妹のことを書きます。妹は自閉症という発達障害があります。見た目では、他人には分かりません。妹は不思議な行動をとり突然のかんしゃくを起こし、パニックや感情のコントロールが難しい、こだわりが強いという特性が多くあります。ぼくから見ると妹は宇宙人のよくな未知の存在でした。相手の感情や空気を読み取ることができない、我が道を行く妹は、ふつうの人とは違うと感っじ、ぼくは色めがねで見えてっいました。

妹が小学生になるまでは。両親は、いつも大変で手がかかる妹の育児に追われてっいました。ぼくは両親に負担をかけたくないから、がまんしてっいました。きつ音があるから、伝えたくても伝えられないもどかしさ、言えずにあきらめてっしまう悔しさ、さみしさがあつたのを覚えてっいます。

今、ぼくは妹の障害と向き合う努力をしてっいます。妹の行動のうらにある感情や理由をいつも考えてっいます。ぼくと同じで、自分が言ったいことや感っじていることを相手に

## 「みんな幸せに」

しあわ

福田 琉斐

京都市立西院小学校六年

僕は明るくて元気である。でも、生まれつき歩くことができない。予定よりも早く生まれたかららしい。

僕がそのことに気付き始めたのは、幼稚園の頃だった。でもみんなと少し違うかなぐらいの感じで、その時は少し驚いた程度だった。毎週リハビリに行っていることはわかっていたけど、まさかここまでとは思っていなかった。

もう少しで幼稚園を卒園する時、初めて小学校の校長先生と出会い、僕のためにサポートしてもらおう部分をたくさん聞いてもらった。それで僕はとても安心し、こんなところで勉強できるんだとワクワクした。入学と同時に車いすも作ってもらい、最初は車輪をこぐのに苦労したけど、今では自分の身体の一部のように使えるようになった。今では自分の生活に欠かせないものだ。そんな僕は入学してしばらくは、学校生活に慣れず、お母さんと離れるのがいやで泣いていることが多かった。交流学級での学習も初めは馴染めなかったが、友達は何も歩けないことを全然気にして

ように思えた。また、先生と過ごしているうちに、障がいがあっても仕事につけるんだ、という新たな希望ももてるようになった。僕たちはレアで似た者同士。まさに運命的な出会いだった。

そんな僕たちには最近困っていることがある。校内で走ったり、鬼ごっこをしたり、階段をとびおりたりする人が増えていることだ。歩くこと、見ることに困りがある僕たちは、とても怖い思いをしていた。僕たちだからこそのできることはないか。そう考え、六年生で代表委員になったこともあり、五月の憲法朝会で全校に生放送で呼びかけることにした。僕たちの安全のことも大切だったが、一番伝えたかったのは「みんなが幸せに暮らせるように」ということ。とても緊張したが、誰もが安全に過ごせる学校になつてほしいという思いを伝えられたと思う。

そして、年齢や性別、障がいの有無、世の中には様々な人がいるけれど、みんながお互いのことを思いやり、みんながお互いの幸せを考えられる社会になつてほしい。僕も支えてくれる人とのつながりを大切にしながら、僕にしかできないこと、僕だからこそのことを続けていきたいと思う。

最後に、いつか僕は歩きたい。この夢は絶対に諦めない。素敵な出会いを生んでくれる僕の足が大好きだし、この足

いない様子で、いつも優しくサポートしてくれた。友達の温かさにふれ、徐々に障がいをもっていても楽しく生きていけるんだという気持ちになつていった。二、四年生でも友達に恵まれ、僕の前向きで明るいところがどんどんつくられていった。

五年生の春、僕に思いがけない出会いがあった。担任が中村先生になったのだ。第一印象は、明るくて元気で、運動ができそうな先生で、とても楽しみだった。でもある日、先生が重い視覚障がいをもっておられることを知った。見た目では全く分からなかったが、視力もかなり悪く、特に視野が普通の人の5%未満であると教えてもらった。とても驚いた。僕たちはお互いに障がいをもっていたのだ。だけど、僕たちには共通点もある。自分の障がいを前向きにとらえ、明るく元気に過ごしているところ、今自分たちにできることを一生懸命頑張っているところだ。だから、僕たちは違う障がいをもっているけれど、同じところにいる

を誇りに思う。お母さん、お父さん、お兄ちゃん、僕を支えてくれる全ての人、ありがとう。